



ビブリオバトル（書評合戦）



第10回全国高等学校ビブリオバトル決勝大会が1月28日に、東京で行われました。グランドチャンプ本は、埼玉県立越ヶ谷高校1年、福本皓埜さんが紹介した『同姓同名』（下村敦史 著、幻冬舎）です。

総合図書館では、昨年10月29日、この大会の予選として、第5回高等学校ビブリオバトル福岡県大会を開催しました。福岡県大会では、県下16校が参加し、熱いトークが繰り広げられ、福岡県立筑前高等学校の野々市谷 伯さんが紹介した「プロジェクト・ヘイル・メアリー」（アンディ・ウィアー：著）がチャンプ本に選ばれました。

ビブリオバトルは、誰でも開催できる本の紹介コミュニケーションゲームです。

「人を通して本を知る。本を通して人を知る」をキャッチコピーに全国に広がり、小中学校、大学、一般企業の研修・勉強会、図書館、書店、サークル、カフェ、家族の団欒などで、広く活用されるようになっていきます。

「ビブリオ」とは、書物などを意味するラテン語由来の言葉で、「ビブリオバトル」とは、立命館大学情報理工学部谷口忠大教授が考案したゲーム感覚を取り入れた新しいスタイルの「書評合戦」です。バトル（発表者）たちが、おすすめの本の魅力を5分間で紹介しあい、聞いていた人たち全員で「一番読みたくなった本」（チャンプ本）を決めます。

ビブリオバトルは、以下の公式ルールで定められています。

- 1 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
- 2 順番に1人5分間で本を紹介する。
- 3 それぞれの発表の後に、参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分間行う。
- 4 全ての発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員が1人1票で行い、最多票を集めた本をチャンプ本とする。

ゲーム形式で、参加者の「本を読む力」「自分の考えや思いを伝える力」「人の考えや思いを聞く力」を育みながら、新しい本との出会いが楽しめるゲームです。

ルールは簡単なので、小学校や中学校の子ども達も、機会があれば、挑戦してみてもいいでしょうか。

TRPG（テーブルトーク・ロールプレイングゲーム）

ゲームといえば、近年、図書館では、ボードゲームを楽しむ活動も広がっています。

図書館は、「静かに本を読むところ」「勉強するところ」というイメージが強い場所ですので、若者の中には、足が遠のく人もいます。そこで、多くの若者の「図書館を訪れるきっかけ」をつくるとともに、「ゲームに関連した本に触れることで読書に結び付ける」ことを目的とし、このような活動が行われるようになっていきます。

TRPGとは、テーブルトーク・ロールプレイングゲームの略で、参加者が会話をしながら架空の世界を演出し、登場人物を演じ、共に課題を解決しながら物語を作り上げていく卓上の遊びです。ゲーム機等のコンピュータを使わずに行います。

ゲームの司会進行をする GM（ゲームマスター）とプレイヤーが、紙・ペン・サイコロなどを使って話を進め、専用のルールブックを元にシナリオを作り、キャラクターを設定することができます。

普段はテレビ画面でやるような RPG のゲームを、テーブルの上で紙とペンとサイコロを武器に喋りながら遊ぶゲームの一種です。

福岡市総合図書館でも、定期的開催しています。興味のある方は、参加してみてもいいでしょうか。

昨年は9月に行われ、中学生・高校生の参加者5名と図書館員で、「TRPG」と「マードーミステリー」を行いました。まずは、参加者がやってみてほしいと思う「TRPG」や「マードーミステリー」の卓に集まり、グループごとに、それぞれの参加者に持ってきた推し本（好きな本）を紹介してもらいました。その後、1卓では現代日本が舞台のクトゥルフ神話 TRPG「マザーグースレストラン」を行い、もう1卓は、マードーミステリー「スペースポンポン号の殺人」を行いました。2時間半のゲームの間、どの卓からも楽しそうな声があがっていました。

令和6年度、次回は8月頃に開催予定です。時期が近づきましたら、総合図書館のHPでお知らせしますので、ご確認ください。



※ マードーミステリー

パーティーゲームの一種。通常、殺人などの事件が起きたシナリオが用意され、参加者は物語の登場人物となって犯人を探したり、犯人役として逃げ切る事を目的としたりして、会話しながらゲームを進めます。

令和5年度も、あと8日となりました。本年度も、子どもの読書活動の推進へのご協力に感謝申し上げます。来年度も、「子どもと本の日」通信をよろしくお祈いします。

<須藤>



4月のことと人

4.2 国際子どもの本の日

1967年、IBBY(世界児童図書評議会)により記念日に制定される。子どもの本で国際理解を深めるために、毎年各国でお祝いや特別なイベントが行われている。1969年からは、IBBYに加盟する国々が順番に、メッセージとポスターを作製して発信しているが、今年は、日本が担当国になり、日本が作ったポスターが世界中に貼られ、日本からのメッセージが各国の子どもたちに届きます。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

(1805.4.2~1875.8.4)

デンマーク生まれ。デンマークの代表的な童話作家。アンデルセンの童話は、多くの国で愛されている。「人魚姫」「みにくいアヒルの子」「マッチ売りの少女」「雪の女王」など約170の作品を遺している。

はやみね かおる (1964.4.16~)

三重県生まれ。ジュブナイルミステリー(ヤングアダルトを対象としたミステリー)作家。「名探偵夢水清志郎事件ノート」シリーズや「都会のトム&ソーヤ」シリーズなど有名である。

瀬田 貞二 (1916.4.26~1979.8.21)

東京都生まれ。日本の児童文学作家・翻訳家・児童文学研究者。「三びきのやぎのがらがらどん」「ナルニア国ものがたり」の翻訳や「かさじぞう」や「ふるやのもり」の再話が有名である。

原 ゆたか (1953.4.28~)

熊本県生まれ。日本の児童文学作家、イラストレーター。『ほうれんそうマン』シリーズのスピノフ作品にあたる『かいけつゾロリ』シリーズの1作目が1987年に発売された。『かいけつゾロリ』シリーズの書籍累計は3500万部を超えている。

図書館員のひみつの本棚 第 215 回

今日は新しい本からご紹介します。

『ルビーの一步 私たちすべての問題』

ルビー・ブリッジズ／著 千葉 茂樹／訳 あすなろ書房 2024年 ¥1300(税別) 31

<お勧め年齢>

乳幼児☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年☆☆☆ 小高学年★★★★ 中学生★★★★

高校★★★★ 一般☆☆☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

1960年アメリカ、ひとりの少女が小学校に入学しました。名前はルビー・ブリッジズ、6歳。彼女は小学校で新しい友達ができるのを期待していましたが、彼女を待ち受けていたのは、彼女が学校に通うことに反対し罵声を浴びせる大人たちと、たったひとりで授業を受ける教室でした。その理由は彼女の肌の色だけ。彼女は白人が通う小学校に初めて入学した、たったひとりの黒人生徒だったのです。

<子どもに手渡す時のポイント>

本書はショッキングな内容ですが、簡潔で冷静な文章は、読者を勇気づけ、希望を感じさせてくれます。表紙はノーマン・ロックウェルがルビーを描いた有名な絵『私たちすべての問題』の一部が使用されており、この原画はオバマ大統領の在任中、一時期ホワイトハウスに飾られていたそうです。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみてください。